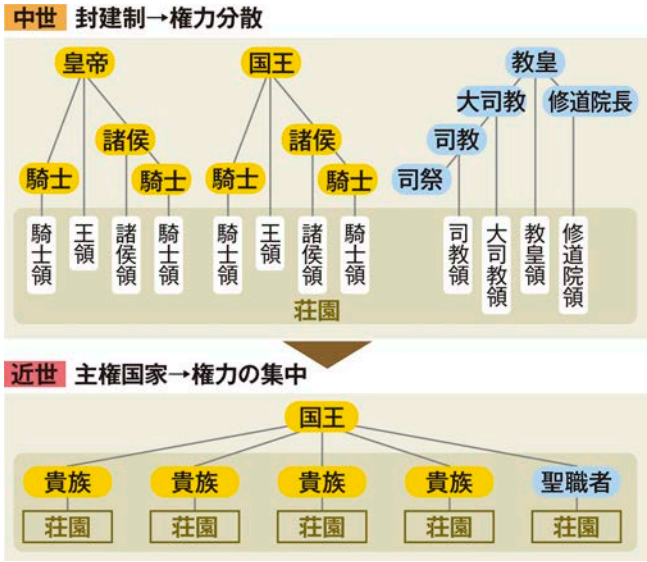
世界史の中の江戸時代―江戸時代、大名と城は如何に独創的であったのか―

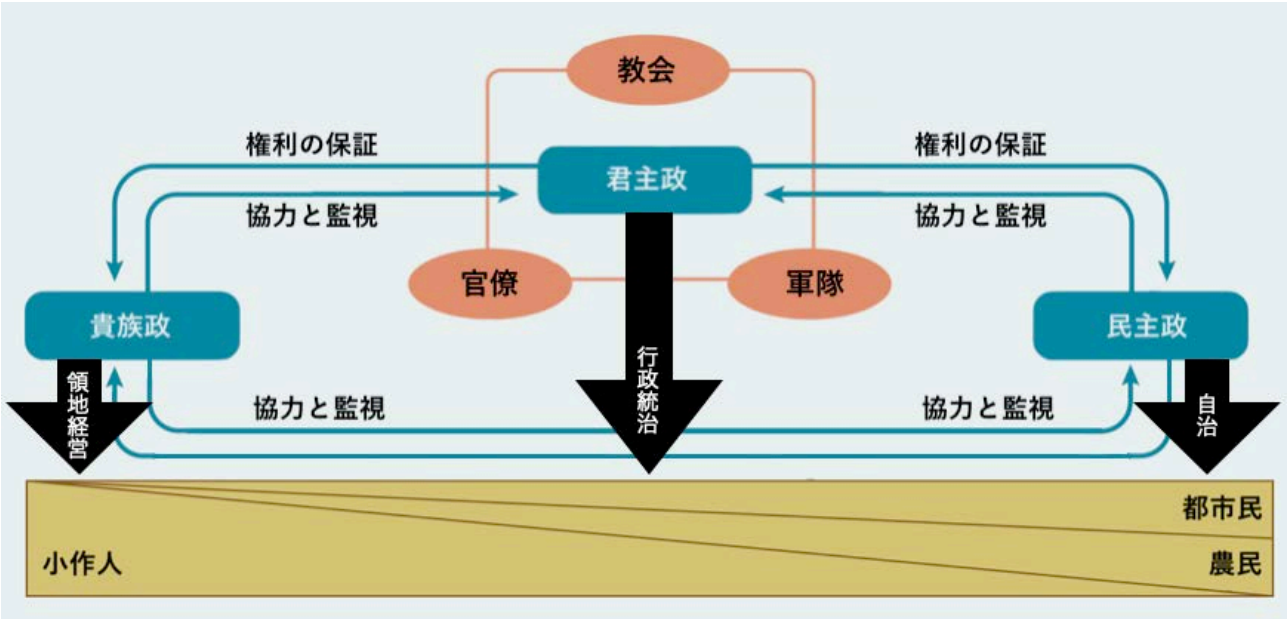
近世ヨーロッパにおける統治とその拠点

大阪大学大学院人文学研究科教授　古谷大輔

はじめに…⑴彦根城世界遺産登録推進協議会：①世界史上類例を見ない長期安定をもたらした「パクス・トクガワーナ」の要因のひとつとして「大名」による地方統治に着目→彦根城で最も具体的に確認できる「大名」による地方統治拠点の特徴：②「政治空間の閉鎖性」と②'「外部眺望の象徴性」→⑵この講演の目的：①近年の西洋史学研究で明らかにされている「近世ヨーロッパの地方統治の特徴」を紹介、②世界遺産に登録されている近世ヨーロッパの「城」のなかから①を最も具体的に示すと思われる例を紹介→※「地方統治のあり方」を比較の補助線とした場合、近世の日本とヨーロッパの「城」の間にどのような異同があるのかを考える素材を提供する

1．近世ヨーロッパの地方統治について…⑴**統治の観点から見た「近世」という時代**：統治にあたる権力者が複数で分散している「中世」と単数で集中している「近代」との狭間の時代（参考：『山川詳説世界史図録　第5版』142頁）→「近世」の課題は、14世紀以降続く疫病・凶作・内乱・戦争などを背景とした大量死を克服し、「皆にとっての幸福（レスプブリカ）」をいかに実現するか？⑵**「統治する者は誰か？」**：①「近世」は16世紀以降の遠隔地交易の利益やキリスト教会の住民情報などを利用して「レスプブリカ」実現のために統治する責任を課せられた「主権者」の考え方が錬成された時代（※近世は君主主権の考え方に基づき「主権者」が君主に限定





された時代、近代は人民主権の考え方に基づき「主権者」が人民に拡張された時代）→②「主権者」を巡る問題：「レスプブリカ」実現を口実とした権力の濫用（＝君主の専制政治、貴族の寡頭政治、人民の衆愚政治）をいかに回避するか？→**近世ヨーロッパの統治を支えたキーワードとして「混合統治/混合政体」が導き出される：**君主による政治（モナーキー）、エリート（≒貴族）による政治（アリストクラシー）、人民による政治（デモクラシー）が相互に権力の濫用を監視（※絶対王政は非常事態に君主による独裁が認められたもの、革命は専制を修正して混合統治/混合政体への復帰を目指すもの）→統治は、a)教会・官僚・軍隊を活用した君主による国家行政、b)貴族を領主とした領地経営、c)都市や農村などにおける人民の自治が混合する…「統治する者はその場により異なる」、**(3)近世ヨーロッパにおける地方統治の特徴**…おおよそ農村部ではaとb、都市部ではaとcが役割分担（例えば軍事行政、警察行政などは君主の執行権（≒インペリウム）によるaの所掌）→農村のbや都市のcは、長らく農村生活や都市生活のなかで認められてきた慣習が「主権者」たる君主によって権利（＝法→※日本とは「法」の意味が異なる）として保証されることで実現（※「権力の濫用」≒「権利（＝法）の侵害」）→権利（＝法）が侵害される場合には、より確実に権利を保証してもらえる君主を頼る（※これが「国境が変わる」ということ…ヨーロッパの「国替え」は日本における「転封/移封」とは意味が異なる…例：17世紀半ばのリトアニア貴族はポーランド王による権利の保証が不確実となると、スウェーデン王をより確実な保証者として求める）→ヨーロッパでは貴族や人民の「権利」の保証が最重要事項…地方統治は多くの場合、君主の執行権（≒インペリウム）も及ばない貴族の「権利」として領地経営が存続（※君主も技術的に完全な中央集権を実現できないので、「レスプブリカ」実現のために貴族や人民による統治に協力を仰ぎながら行政を補完≒「君主と政治共同体の統治（dominium politicum et regale）」）

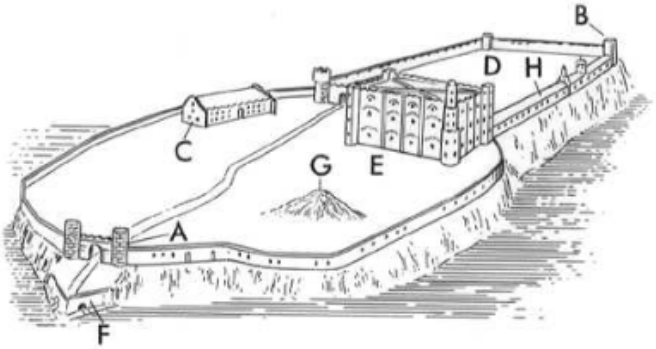
ヴェルサイユ宮殿

要塞都市ヌフ＝ブリザック

シュリー＝シュル＝ロワール城

【小括】「皆にとっての幸せ」を実現する担い手は君主政の任務だが、その実現のために貴族、人民にが求める権利を法として保証する（＝「法を強める」）一方、三者間の牽制の結果、反乱/強訴のような「異議申立」により不安定をもたらす可能性の高い混合統治/混合政体は、中央集権と分権統治の併存（幕藩体制）を背景に安定を築いた日本の統治とは異なる→**近世日本の大名による「統治」は世界史的に観点から特筆に値する**

2. 地方統治の拠点としての「城」について…(1)「城」を意味する複数の語彙があるヨーロッパ　例：英語では“castle（城/城郭）”、“fort（城砦/要塞）”、“palace（城館/宮殿）→近世では「君主の執行権の及ぶ場（＝君主による政治）」として代官や軍人が駐在/駐屯する場が「城砦/要塞」、君主と貴族・人民の謁見や外交や宗教の儀礼が執り行われ君主が居住する場が「城館/宮殿」⇔地方における貴族の領主経営の拠点は「城/城郭」　例：a)ベルサイユ宮殿（Palais et parc de Versailles/1979年世界遺産登録）は君主の行政と生活の拠点となる「城館」だが、軍事的機能や行政的機能をもつ「城郭」や「要塞」ではない、b)ヴォーバンの防衛施設群（Fortifications de Vauban/2008年世界遺産登録）は防衛を目的に君主の執行権が地方に及ぶ「要塞」だが君主の生活や儀礼の場ではないので「城館」ではない、c)シュリー＝シュル＝ロワール城（Château de Sully-sur-Loire/2000年「シュリー＝シュル＝ロワールとシャロンヌ間のロワール渓谷」に含まれる城郭として世界遺産登録）は17世紀初頭にシュリー公が購入以来、シュリー公家の領地経営の拠点となった「城郭」である、**(2)貴族による領主経営（≒地方統治の主流）の拠点となった「城/城郭」とは？**→「<u>城/城郭」は領地経営のための行政・司法機能、領地防衛のための軍事機能、領主（＝貴族）の居住機能を複合する建築群＝キーワードは「複合城郭 Castle complex」</u>　例：A望楼と城門、B礼拝堂、C厩舎、D内庭、E外庭、F堡塁、G司法の丘、H兵舎



castle 1
A keep; B chapel; C stable; D inner bailey; E outer bailey; F barbican; G justice mount; H soldier's quarters

J.J.Anderson, A School History of England (New York,, 1889)

【小括】地方統治に求められた行政機能/司法機能/軍事機能などの複数の機能を複合する「複合城郭」の姿は、日本の地方統治の拠点にも共通する　参考：“Hikone Castle is a castle complex (including the castle town) with a wide area, including the artificial Serigawa River.（彦根城は、人工の芹川を含む広大な敷地を持つ複合城郭（城下町を含む）である）”, 滋賀県, “Hikone Castle Site”（https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/bunakasports/bunkazaihogo/312317.html）→**<u>「複合城郭」を比較の補助線とするならば、彦根城はヨーロッパの「城/城郭」と比較可能な対象である</u>**

3. 近世ヨーロッパのにおける地方統治の拠点の論じられ方—ネスヴィジにあるラジヴィウ家の建築・住居・文化複合体（2005年世界遺産登録/ベラルーシ）を例に—…(1)ネスヴィジ城（ベラルーシ共和国ミンスク州ネスヴィジ市に位置）：ポーランド＝リトアニア共和国（1569-1795年）の権力中枢に位置し続けたリトアニアの大貴族（マグナ—ト）であるラジヴィウ家が16世紀末以降に築いた地方統治拠点のひとつとなった「複合城郭」（→ラジヴィ

ネスヴィジ城

ウ家関連ではミール城建築物群（2000年世界遺産登録）も知られる）、**⑵世界遺産に登録されているネスヴィジ城の資産**：ネスヴィジ城、ウシャ川からの人工池と運河、5つのイギリス式庭園、キリスト聖体教会→**⑶ネスヴィジ城の論じられ方**：①西欧起源のルネサンス様式の城館建築、バロック様式の教会建築、イギリス式庭園の中東欧への伝播の例証→②文化伝播に果たしたラジヴィウ家の役割「ラジヴィウ家の人びとは、政治、軍事、教会の指導者、芸術の後援者、収集家…として活躍…建築、絵画、文学…工芸などに影響を与え、ベラルーシ、ポーランド、リトアニア、ウクライナの文化形成に傑出した役割を果たした。この点でラジヴィウ家とネスヴィジが中東欧に果たした…役割は、西欧におけるメディチ家やスフォルツァ家と比較できる。」（ICOMOS, “Radziwill complex (Belarus)”, *Advisory Body Evaluation*, 2005, p.95.）→③ポーランド＝リトアニア共和国は近世ヨーロッパに実在した国家のなかでも、選挙王制や議会、抵抗権/強訴権、拒否権など、「混合統治/混合政体」の考え方を最も具体的に制度化させた国家であるが、「統治の拠点」という観点からの論じられ方は確認できない（≒ネスヴィジ城、庭園、教会はラジヴィウ家の私有財産）、**⑷「地方統治の拠点」の観点からネスヴィジ城を問い直す**…①ポーランド王国とリトアニア大公国とが連合するポーランド＝リトアニア共和国の地方統治は、王＝大公の任命する知事が統治する県から構成→ラジヴィウ家はリトアニア大公国下の複数の県下に世襲不動産を所有（→※莫大な財力を背景にポーランド＝リトアニア共和国への軍事力提供などを通じて、国政レベルでは最高司令官職（ヘートマン）を歴任）、②莫大な不動産経営の拠点としてネスヴィジ城やミール城のような城/城郭を各地に建造 例：ネスヴィジ城のコートハウス（中庭付き建物群）は、ラジヴィウ家の生活の場であると共に、使用人を通じた資産経営の場/領地住民との交渉や裁判の場→許可された者が立ち入ることのできる場（交渉や裁判の際には開かれる政治空間の半「閉鎖性」→庭園は開放）＆ラジヴィウ家の資産防衛の観点から運河

ネスヴィジ城内のコートハウス

マリシエンキ公園

キリスト聖体教会

を兼ねた堀、城壁、望楼、堡塁などの軍事機能をもつ→（一見して「城/城郭」とわかる外部眺望の「象徴性」）

【小括】「複合城郭」を比較の補助線としながらネスヴィジ城を抽出し、近世ヨーロッパの地方統治の拠点という観点から見ると、確かに政治空間の半「開放性」と外部眺望の「象徴性」は確認できる→**ラジヴィウ家の場合、「混合統治/混合政体」の貴族政を担う立場からポーランド＝リトアニア共和国における「レスプブリカ」実現に関与したが、ネスヴィジ城はあくまでもラジヴィウ家の私的な家産経営の場である点が、「公儀への御奉公」を第一に諸大名の模範となった井伊家の統治拠点である彦根城との違いである**

おわりに…⑴近世ヨーロッパの統治から考える近世日本の統治の特徴≒約260年に渡る安定をもたらした要因は何か？、⑵近世ヨーロッパの不安定は（…16世紀の宗教内乱や17世紀の気候変動に伴う凶作なども背景にあるが…）統治の観点から見れば「混合統治/混合政体」を前提とした君主による政治（モナーキー）、貴族による政治（アリストクラシー）、人民による政治（デモクラシー）の対抗関係に起因する→翻って、近世日本の安定した統治は「大名」の媒介する幕政と藩政の方向性の一致にみられる（→※言葉遊びが許されるならば「ダイミョークラシー」の存在）、⑶地方統治の拠点となる「複合城郭」には、ヨーロッパ/日本の双方とも①政治空間の半「開放性」と②外部眺望の「象徴性」を確認できる→ヨーロッパの地方統治の拠点は（多くの場合）自らの権利を踏まえた家産経営を機能させる場⇔日本の地方統治の拠点は「仁政」のような徳川期の統治理念を幕府とともに実現する「ダイミョークラシー」が可視化する場